

## 令和5年度瀬戸内海ブロック魚種資源評価会議 議事要録

令和5年8月17日(木)10:00~15:00(浮魚類)・18日(金)9:30~15:00(底魚類)  
場所:チューリッヒ東方2001(広島市東区光町)およびMicrosoft Teamsによるリモート方式  
参加機関数:27 参加者数:95名(会場:26名、リモート:69名、外部有識者1名含む)

### 【会議概要】

水産研究・教育機構の各系群資源評価担当者より、令和5年度の資源評価結果と報告書案について説明があった。ヒラメ瀬戸内海系群、マダイ瀬戸内海中・西部系群は令和3年度に、カタクチイワシ瀬戸内海系群、サワラ瀬戸内海系群、イカナゴ瀬戸内海東部系群、マダイ瀬戸内海東部系群、トラフグ日本海・東シナ海・瀬戸内海系群は令和4年度に、それぞれMSY等資源管理基準値を提案し、各系群ともこれら資源管理基準値案に関して資源評価結果説明会や水産政策審議会資源管理分科会資源管理手法検討部会において説明がされており、今年度の資源評価はMSYの考え方に基づいて行われた。資源管理基準値案は、カタクチイワシ、サワラ、ヒラメ、マダイ(2系群)は1Aルール、トラフグは1Bルール、イカナゴは2系ルールに基づいて計算されている。

#### (1) カタクチイワシ瀬戸内海系群

2022年の資源量は44.9万トン、親魚量は9.6万トンと推定され、資源水準はMSY水準を上回り、漁獲圧はMSY水準を下回ると判断された。

#### (2) サワラ瀬戸内海系群

2022年の資源量は8.1千トン、親魚量は5.4千トンと推定され、資源水準はMSY水準を下回り、漁獲圧はMSY水準を上回ると判断された。

#### (3) イカナゴ瀬戸内海東部系群

資源量指標値(1989~2023年)に基づき資源状態を評価し、現状(2023年)は14.3%の資源量水準であると評価された。

#### (4) ヒラメ瀬戸内海系群

2022年の資源量は44百トン、親魚量は31百トンと推定され、資源水準はMSY水準を上回り、漁獲圧はMSY水準を下回ると判断された。

#### (5) マダイ瀬戸内海東部系群

2022年の資源量は175百トン、親魚量は77百トンと推定され、資源水準はMSY水準を下回り、漁獲圧はMSY水準を上回ると判断された。

#### (6) マダイ瀬戸内海中・西部系群

2022年の資源量は117百トン、親魚量は78百トンと推定され、資源水準はMSY水準を上回り、漁獲圧はMSY水準を下回ると判断された。

(7) トラフグ日本海・東シナ海・瀬戸内海系群

2022年の資源量は678トン、親魚量は427トンと推定された。1BルールによりMSY管理基準値が計算されており、資源水準はMSY水準を下回り、漁獲圧はMSY水準を上回ると判断された。

これらの浮魚類3魚種系群および底魚類3魚種4系群について、資源評価報告書案は承認された。

**【要点】**

カタクチイワシ瀬戸内海系群では、直近の2022年の漁獲量が多かったこと、2023年の親魚量推定値が高いことについて、情報交換、議論があった。現行のチューニングコホート解析について結果が実態に合っていない面があるとの指摘があり、より柔軟なモデルでの解析も検討していくとの回答がなされた。

サワラ瀬戸内海系群では、年齢別Fの違い、1、2歳魚のFが低いことについて確認があり、目合選択性や漁業者が漁獲を避けるといったことはないが、春の産卵親魚としての3、4歳魚に漁獲が向くなど、漁獲される海域、時期の違いによることが考えられると回答があった。資源水準に応じた成長変化、ALK (Age-Length Key) について検討の必要性の指摘があった。

イカナゴ瀬戸内海東部系群では、CPUE標準化で用いている日付ごとの体長、体重のデータについて、兵庫県の詳細なサンプリングによるものであることの確認があった。

ヒラメ瀬戸内海系群では、外部有識者より、ALKに関して、特に1歳魚の体長・成熟率について、2026年度の管理基準値更新時までには情報の精査を行うよう提案があった。

マダイ瀬戸内海東部系群では、漁獲が急増するなかでも親魚量水準がMSY水準に満たないと判断されることについて、事業関係者の現場感覚と一致しているのか質問があった。また事業関係者からは、近年の小底CPUEの増加について、狙い操業か否か質問があり、各県担当者からは価格低下もあり狙い操業ではなく量自体の増加により獲れている、多魚種の減少により獲れるものがマダイのみのため漁獲しているなど、状況共有がされた。

また、マダイの遊漁採捕量について実態把握の必要性の指摘を受けていたことから、遊漁船の隻数や稼働日数などのデータから採捕量が推定されレポートとして提出された。

トラフグ日本海・東シナ海・瀬戸内海系群では、加入量が減少していることについて、産卵場に回帰する親魚が少なくなっていることが要因である可能性の説明があった。系群外での漁獲が増加している状況に関連して、本種の分布回遊や系群構造の調査が進められていることについて紹介があり、情報交換が行われた。

**【外部有識者講評】**

新ルールに移行し水研、JVともに多大なご苦勞をされていることかと思う。資源評価は我が国資源の保全・利用を考えるにあたって重要であるため、引き続きよろしくお願ひしたい。イカナゴトラフグのように厳しいものもあれば、マダイのように増えていたり、ヒラメのようにMSYに近い魚種もある。科学的知見がますます求められる。ヒラメのALKの部分もしかり科学的な根拠があることが望まれる。成長や成熟、集団構造などこうした生物学的知見の収集に努めていただくとともに、それらを論文にして発表していただきたい。